



『ひかる石のおはなし』大賞

祖母からのおくり物

3年 H・Tさん

先月とても仲良くしてくれた祖母が亡くなりました。祖母は、あまりしゃべらないけれど、いつもやさしい表情で私の話を聞いてくれました。学校であったこと、母に怒られたこと。いつもうんうんと聞いてくれました。家族や友達と、話をすると必ず返事をしてくれるのに、祖母は何も言わずに私の話を聞いているのはちょっと不思議でした。それでも祖母との会話がとてもたのしかったです。そんな祖母がもういないと思うと、なんだかカラカラした気持ちになります。そんな時にこの本に出会いました。

この本は、母親を亡くしたことで誰にも話をしなくなった男の子が、学校の帰り道で見つけたひかる石と会話をすることから始まります。それをきっかけに父親から母親は石が好きだったことを聞かされます。知らなかった母親の二面を知ること、男の子はだんだん心を開いて

いくお話です。

私がこの本で一番おどろいたことは、あのカチカチの石が、大昔の生き物の骨や植物だったかもしれないということです。そうするともしかしたら、石だけではなく、いろいろな物、空気やにおいも、きっと誰かの何かなんじゃないかと考えるようになりました。

祖母は、火葬場で骨になったけど、煙にもなっていました。その煙はどこにいったのだろう。風に乗る雨に降られ、川に流され、海に沈み、地球にもぐり、しばらく休んだら、海底火山の噴火で飛び出して、軽石になって漁船の邪魔をしているのかな。そう考えると、お墓の前で大笑いしてしまいました。

この本を読んで、カラカラした気持ちはなくなりました。むしろ世界が広がったように感じます。私の中で何かが変わったことは間違いないありません。

きっとこの本は、下を向いていた私への祖母からのプレゼントなのだと思います。